

大鏡の文藝性

北西鶴太郎

前号に引續き今回は、歴史物語即ち歴史文学の一形態としての大鏡について、その文藝的側面を検討し、同書の文藝性が、果して如何なる性格をもつものかを探つてみたいと思ふ。身辺徒らに匆忙、意を盡し得ない点は、いくへにも御寛容を請ふ次第である。

口唱性

小説のもつ「書く意識による記述性」に対して、「語る意識による口唱性」は、物語文学の「性格であることは、すでに池田博士の説かれたところであるが、わけても大鏡は、その創意になる対話的、戯曲的構造のゆゑに、その口唱性が全篇を一貫してゐることは、こゝに事新しく論述するまでもないところである。

人物の性格、心理、乃至その発展、人物をとりまく“milieu”そのすべてにおいて描写を強調し、小説の技法は、無技巧の中の唯一の技巧とも称すべき描写でなければ夜も日も明けなかつた自然主義時代には、「物語る」といふ作の態度は、極度に排撃せら

れ、「上手なお話」といふ言葉は、作を罵倒する標語であるかの觀を呈し、「物語る態度」の中には、何かしら「眞」を裏切るもの、嚴肅なる人生を冒瀆するものがひそんでゐるかのやうに輕蔑されてゐた。けれども、今、かゝる風潮の時代的意義などに就いて論究する暇はないが、大鏡の場合についていへば、この物語性、口唱性に独自の意義と価値を認めざるを得ない。

作者は、自己の分身大宅世継を五十余回、(世継の妻を數回)、夏山繁樹を二十數回、青侍を十數回の多さに亘つて登場せしめ、更に語られる史上の人物の下した論評や時人の噂話なども交へて、或は対話的に、或は独演的に、或は討議的に、また時としては独語的歎声として、史実を語らせ批判を下さしめた。

これは、史実をさまざまの側面、さまざまの角度から觀察し吟味して歴史の眞相を検討するに便宜を与へ、またあらゆる立場を考慮して批判を公正不偏妥當ならしめる点に有利な條件を提供し、讀者を信賴に導く巧妙な手段である。而も、これを大がかりな戯曲的手法として全篇を包んだ点は、到底單なる描写技術などの及ぶところではなかつたと思ふ。まして大鏡は、一種口唱的描

写法とでも謂はば謂へるやうな特殊の手法を駆使して、描写の方面においても侮りがたい手腕を發揮してゐるに於いてをやである。

五十嵐博士などは、大鏡が、本物の劇(能、狂言)以前の最もドラマティックな文学で、その對話や身振挙動などの微妙な影を写したしやれた筆致や、短い文句の中に生きくと人物を写し出す簡潔入神の技法に傾倒せられ、熱氣を帯びて来ると時としてましく立てる演説口調は、大雄辯家の堂々たる大演説を聴くの概があるところを極めて称讃せられた。

多角的な史実の探究と、批判の公正を成就し得た大鏡の口唱性は、話し上手の翁達や聴き上手の青侍や聴衆を自在に駆使し、雑々物語の中に世継自身が、青侍にむかひ、「今日はたゞ殿の(あなたが一)珍しう興ありげにおぼして、あどをよううたせ給ふ(まうたれる)にはやされ奉りて、かばかりも口あけそめて侍れば」と告白してゐるやうに、話者と聴者の相互反応が、自らに人生知己の感激を煽り、さすがの長談議も、毫も倦怠の色なく、魅力を以て巻を終らしめるのである。

殊に文芸性の面から見て注意したいのは、老人の言葉つきである。題材に応じて自在に変化するその語気語調、含みある沈黙休止、余情豊かな省略と倒装、更にその文末のニュアンスに富んだ言語表情、私は、この一点だけを取り出して精細に吟味してみたい魅惑を今感じてゐる位である。

いかにくやししくおぼしけむな。

帝王の御感侍るにますことやはあるべきよな。

さして珍らしげもないこれらの助詞も、之を使ふ人と場面と素材とが、適切にマッチして、いかに文芸的効果を挙げてゐることか。

雄の雄鳥はかがまりをるものか。

御顔にささと走りかかるとか。

これらの言葉は、その場に即して見れば、まさに事象そのもの、生それ自身だと謂ひたい位に、生きたものとなつてゐる。

聴覚に訴へる話す意識で書かれた文章は、視覚を予想する記述意識の文章に対し、用語の選択(語感、音感)、語の配置、断続、余韻等に就いて、細心の配慮を肝要とする。また聴者の把握、記憶の力を考慮して、適當の長さを持たねばならぬ。これらの点についても、大鏡の示唆するところが少なくないと思ふ。放送文芸の研究家などにとつては、過去の文化遺産として、これを継承し発展せしむべき点が多々あるのではなからうか。

二

可笑性 i

大鏡のをかしみは、二つの方面に現はれてゐる。即ち、語られる題材の方面と、語り手たる老人等の動作態度の方面とである。

まづ題材の方面から見てゆかう。

一つの場合は、藤原時平の笑癖についてである。

此の左大臣、物のをかしさぞ、え念せさせ給はざりける。

笑ひたゝせ給ひぬれば、すこぶる事も乱れけるとか。北野

と世をまつりごたせ給ひけるあひだ、非道なる事おぼせら

れければ、さすがにやむごとくなくてせちにし給ふ事をば、
いかにはとおぼして、この大臣のし給ふ事なれば、不便な
りと歎き給ひけるを、なにがしの史(書記)が、「事にも
侍らず、おのれかまへてかの御事をとゞめ侍らむ」と申しけ
れば、「いとあるまじき事、いかにしてかは」などのたま
はせけるを「たゞ御覽ぜよ」とて、座につきて事厳しくさ
だめの、しり給ふに、この史、文挾みに文挾みて、いらな
くふるまひて、この大臣に奉るとて、いと高やかにならし
て(放屁)侍りけるに、大臣、文もえとらず、手わななき
て、やがて笑ひて、「今日は時平はずちなし。右の大臣にまかせ
申す」とだにえいひやり給はざりければ、それにこそ(レツ
テヨツ)菅原の大臣の御心のまゝにまつりごち給ひけれ。
大鏡としては、こゝは、さして精彩を放つてゐる箇処とも思へ
ないから、敢へて力説を試みるにも当るまいが、それでも時平の
性癖やその場の情景が、簡潔に要領よく写されてゐる。作者によ
つて、漢学は殊の外劣つてゐたが、「大和魂などはいみじくおほ
したるものを」と、その世間智、従つてまた政治的手腕を許され
た時平、時の一人、今の総理大臣の地位に立つ時平が、一たん
笑ひたつが最後、どうにもそれを喰ひとめることが出来ないとい
は、いかにも安つぽくて滑稽であるが、それも持病とあれば又氣
の毒にも感じられる。それが、道眞等とある重要政務を議するに
當つて、例の権勢を恃んで強引なワンマン振りを發揮しようとする
。「非道とは云へ高貴な方が是非にと深く思ひ入つてなさること
だから、之を遮るのもどうか、しかし困つたことだ」といふ道

眞の歎きも、彼の家格や性格から考へて、いかにもとうなづけ
る。その悩みの矢先に、某書記官の「なに、わけはございませ
ん。私が必ず止めて見ませう」と、無造作な、自信満々の提
言、「軽卒に——、どうしてそんなことが」と危懼躊躇する道眞
に対し、「ま見ていらつしやいませ」と実践に進む書記官、時平
が、会議の座に着いて一所懸命激論をたゝかはせてゐる最中、こ
の書記官が、恭々しく文挾に奏狀を挟み、仰々しく勿体をつくつ
て、時平公に捧げ奉る。この壯嚴、嚴肅な時平と書記官の行動が、
瞬間的に、次のいと高やかな一発の放屁へと飛躍し、緊張から弛
緩への笑の原理をそのまゝに具象化し、時平の笑癖に点火する
や、時平の横隔膜は、激烈な上平運動を始め、「文もえ取らず、
手わなゝきて」(とは的確な表現である)悶絶的に笑ふ。「今日は
やりきれない。右大臣にお任せ申す」とさへも言へない、只そ
れを察するに足る声色、手つき、身振あるのみで、一切は解決せ
られ、道眞の政見が完全に遂行せられたといふ。

この笑の本質は何か。

逞しい大和魂をそなへた偉風堂々たる時平公が、一下僚の術中
に陥つて、もろくも敗亡した。

ベルグソンによれば、笑は一種の社会的懲罰だと云ふ。いやし
くも大臣たるものが、かくあつてはならないものであるといふの
が、社会的道念であるならば、この場合の時平は、まさしくそれ
に該当しよう。ことに前論に述べたやうに、著者の道眞に注いだ
大きな同情、火雷天神の祟りによる時平一族の血統断絶、長い眼
で見られた運命のさばきを聴き続けて、時平伝の終らうとする最

後に、この事件を聴かされた我々には、時平の存在もあまり芳しいものとして映つて来ない。とすれば、この笑の社会的懲罰性をますます裏つけざるを得ないことになる。しかし、この笑の底には、なほ翁の善意がある。

それが懲罰のとげ／＼しさを寛和して、人は、悪意なき笑を朗らかに笑ふことが出来る。

なほ時平の笑癖については、歌舞伎に、安永六年大阪角座上場の並木吾瓶作「天満宮茶種御供」があり、明治三十三年明治座に上演せられた福地櫻痴改作の「時平の七笑」がある。殊に後者の時平は、「菅原伝授手習鑑」のやうな公家悪ではなく、表は濃厚な人物を装つて菅公を敬ひ、陰謀が功を奏して菅公の左遷となつた際には、悲歎の涙にくれて後事を託される様など、誰が見ても悪人とは見えぬ擬装ぶりで、菅公の立つ後見送つて、ほゝゑむのである。かくて廟堂をわが物にした時平は、誰一人わが大望を知ることがないかと、菅公のお人好しを笑ひ、さらに大きく天下をあざ笑つた。「笑」そのものを全篇の骨子とする珍奇な劇と謂はれるものであるが、今は比較討究の暇がない。

(この歌舞伎の項は、飯塚友一郎氏の歌舞伎狂言細見による。こゝに附記して感謝の微意をさしづける。)

三

可笑性 ii

この種の可笑性に、なほ倫理性のからんだものとして、村上天皇の皇子八ノ宮永平親王の物語がある。八ノ宮は、当代の麗人宣

羅殿女御芳子の御腹に生れ、「御貌などはきよげにおはしけれど、御心極めたる痴れ者とぞ聞き奉りし」と大鏡はいふ。女御芳子の兄は、左大臣濟時で、「この大將は、父大臣よりも、御さまわづらはしく、くせ／＼しきおぼえまさりて、あまり名聞になどぞおはせし」と、批評せられてをり、八ノ宮の叔父にあたる人物である。

ある日彼は、甥の八ノ宮に大饗をおさせ申したが、根が大の酒好きであるから、人々を酔はせて遊ばうと心構へして親王に、「もし上達部たちが早く退出するやうだつたら、『暫く』と云つた調子で、愛相よく御引きとめ遊ばせ」とよく教へ込んでおかれた。もと／＼親王は、人がらが妙にボツとほけてをられるけれど、尊い親王様の折角の御催しであるから、搦紳達があまた参列せられたのも、さすがに古代である。けれども、生憎、当日は、公務の差合のあつた日であるから、人々は急いで退出されようとするので、親王は、をちの言はれたのはこゝだと気づかれて、大將濟時の方を度々眺めやられる。濟時は、チラと目くばせして意を通じると、親王は、眞赤になつて、急にはお声も出さず、いきなり無言で、物におびえたやうに、けたたましく、乱暴に、帰りかけた客の袍のかた袖もちぎれるばかりにしがみつかれたので、そこに居合せた上達部は、のこらず末の座まで顔見合せく、どうにも我慢がしきれなかつたのだらう、奇妙な表情をして、抛無用事にかこつけながら、そそくさと退出するのであつた。道長公などは、当時まだ若殿上人でいらせられた頃であるから、末座の方に居られてよく御覽なさらなかつた。たゞ「人々の妙なうす

笑ひをして出て行かれたのを見た」と、当時の笑柄としてよくお話しになる。大將は、一体、何の爲にこんな事をおさせ申し、又、かうおつしやいませなどとお教へ申したのだらうと後悔せられて、お顔も眞青になつて居られた。実に、親王はもとよりこんなお方だと誰も承知してゐたから、悪く申すものはない。大將こそ、親王をかうした御心の方と知りながら、是非しなければならぬ事でもない余計な事をしでかして、こんな見苦しい有様をあらまたの人に見せも聞かせもしたとと非難するのであつた。非常に立派な用意のある人と世評のあつた方が、残念な恥辱を取つたものである。

(原文
意訳)

紙面の節約の爲に、味もそつけない拙訳を試みて、原文の陰翳や含みを失つてしまつたが、この短い物語の中にも、人物の動作、心理、性格が躍如として表現せられ、決してピントを外してゐない。智能と才分に恵まれぬ親王の潜在的劣等感が、叔父濟時の指図を、まるで無上命令でもあるかのやうに遵奉しようとした御心根もいぢらしいが、忘却の闇から卒然その指図の言葉を取り出された心理の動きの自然さ、それでもなほ再現した自己の記憶に信頼がもてず、「大將の御方をあまたたび見やらせ給ふ」自己の記憶の確かめと叔父の加勢を哀願するやうな心理、「その通り、今ですぞ、あの件は！」といふやうな叔父の目くばせに肝をつかれて、ハツと赤くなり、吃どまりのやうに御口をもぐ／＼させながら、叔父のいふ愛相よき言葉も忘れ、全身の力をこめての賓客抑留手段、そのヒステリックな悲壯さ、それが「顔けしきかはりつゝ、とりあへず事に事をつけつゝいそぎ」退出する上達部達の

行動へと導かれ行く例の緊張から弛緩への飛躍的推移、上達部達の親王に対する同情、憐憫、乃至礼儀の前に不用意に飛び出した「末の座まで見合はせつゝ、えしづめずやありけむ、顔けしき変りつゝ」ある苦しいしかも是非なき無作法、道長の「人々のほゝ多みて出て給ひしをぞ見し」といふ「ほゝ多みて」などにも、複雑な含みがある。さても罪なことをした大將であるが、その報いが悉く自己の頭上に落下したのであるから、「悔しくおぼすに、御色も青くなりてぞおはしける」筈である。だから世評も、作者の批判も、当然落ちるべきところに落ちてゐる。

今、この場合の可笑性の性格を捉へる爲に、同じく八ノ宮の暗愚を笑つた栄華物語の扱ひ方を吟味して見よう。

永平親王

栄華月の宴の巻に、八ノ宮は、「いと美しうおはしませど、怪しう、お心ばえぞ心得ぬやうにおひ出で給ふめる。御をぢの濟時の君、(中略)万にあつかひ聞え給ひて、小一條(濟時)の寢殿におはし」たが、濟時の女で、「えもいはず美しき姫君(城子、後三條帝)」が、父の寵愛をほしいままにして同居してゐられたのを、まだ幼い八ノ宮の御心にも、煩はしいまでに恋ひ慕はれるので、濟時は、大事の姫君の事とて、忌まはしく思つて対面も許さず、八ノ宮の痴しればんだ御心にもかうした恋慕の「御心さへおはするを、いと心づきなし」と思ふのであつた。この姫君の兄長命君や従兄の実方などが、よく八宮をなぶりものにする。宮がべそをかいてしく／＼鼻をならされたりなどすると、彼等は面白がつて、ます／＼それをからかふのであつた。

八ノ宮十二歳の頃であつたか、ある日、実方や長命等が集つて、「馬に乗りならはせ給へ。乗らせ給はぬは、いと悪しき事なり。宮達は、さるべき折々は、馬にてこそ歩かせ給はぬ」など云つて、御既の馬を引出して、濟時の前でお乗せ申し、がや／＼嘯し立てるもんだから、宮は顔を眞赤にして、馬の背中にくひつくばかりひれ伏されるので、連中は、どつと笑ひ立てる。濟時は、氣の毒になつて「抱きおろし申せ、恐しいと思はれるんだらう」といふと、皆騒ぎ立てながら抱き下してみると、馬のたて髪を一口くくんで入らつしやる。濟時は、どうも困つたものだと思ひ、女房達は笑ひころげるのであつた。(原文
意訳)

以上拙訳は論外であるが、原文も、「馬の髪をひと口くくみておはするを、宰相いとわびしと見給ふ」といふ印象的な一句を除けば、用語が重複し、文勢が弛緩し、描写が平面化して、大鏡のやうな迫力がない。笑の性格は、懲罰的——岡崎義恵氏の所謂「侮弄のをかし」として取扱はれてゐる。人の缺陷を暴露し、弱点を嘲弄して、暗に自己の優越に満足してゐるのみならず、猫に紙袋をかぶせて苦しむのを喜ぶやうに、命がけになつてたてがみに執りつく宮の辛さには片鱗の同情もよせず、人をいぢめて喜ぶ人間の残忍性さへ感じさせる。頑是ない子供等はともかく、女房までが笑ひころげるに到つては、そのたしなみのないはしたなさに、「心あり」と評された濟時のしつけのほども思ひやられていゝ氣はせぬ。

大鏡と同じくこの笑の範疇は、懲罰的のそれであり、侮弄のそれであつても、大鏡は、罪を濟時に帰し、八ノ宮の行動が濟時の

性行を実証する一事例であるかのやうに取扱ひ、彼の企図乃至性格が、当代の貴族のエチケットを無視し、生活気分を傷けるものとして非難を加へ、濟時の摂関列伝中における一種の精神的な位置づけを行つたやうな識見を示してゐるのに対し、榮華の作者は、作中人物の実方や長命や女房達と一緒になつて、専ら宮の弱点を暴露し、之を愚弄することに夢中になつてゐる。これも当代世相の一面ではあらうが、大鏡の氣品は到底望むべくもない。

なほ榮華には、八宮について次のやうな逸話も載せられてゐる。冷泉天皇の中宮が、御子もいらせられずつれ／＼であるまゝに、この八宮を御養子として、時々濟時の邸から中宮御所へ通はせようといふ思召があると聞いた濟時は、「かの中宮は、御宝物をうんと持たれる宮様ぢや。故朱雀院の御宝物は、たゞ御一人子のこの宮様だけにお譲りなつたのぢや。それを又譲り受けたら、この宮は、まるで宝の王様になつてしまふ。幸福な宮様ぢや」と、吉日を選んで八宮を中宮に初見参として差上げることになつた。

中宮は、「八宮は、小一條宰相が教へ立てただけあつて、御本性もさぞかし」と、大きな期待をかけてお迎へになる。宰相が、懸命に作り立て、お目みえに差上げたので、見れば御顔もお姿もお美しい。御髪なども、房々と膝下まで垂れ、まことに美々しい直衣姿である。やがて請じ入れて寢殿の日の御座の方にかしづきすゑられ、お供の人々にはかづけ物をし、八ノ宮には贈り物などして、その日はお返しになつた。中宮は、何かと仰せられたけれど、宮には一言の御答もなく、たゞ御顔ばかりを赤めてゐられた

ので、これは定めし限りもなく高貴で鷹揚でいらつしやるせるとばかり思召されるのであつた。

その後時々中宮御所へ参られるが、なほ物を仰せられない。怪しいと思し召してゐる中に、ふと中宮の御惱といふことになつたので、濟時は、宮を御見舞にさし上げる。入宮は、「御見舞に行けば何といふの」とたづね、濟時から「御惱の由承りましておつしやればよいでせう」などと教へられて、中宮に参ると、例の如く請じ入れられたところ、教へられた口上をすらく述べられるので、中宮は、御惱の中にもかはゆく思召され、「ではまた御ゆつくりお出で下さいね」など仰せられる。さて帰邸の後、濟時に、「あの挨拶はうまく言つたよ」といはれるから、「どうしてまたいうたなどと仰るのです。中宮様はあんな尊いお方ですのに。」
「おゝさうだつた〜。」と云はれるものゝ、さして反省せられるらしくもなく、なほざりに聞き流されるのを、困つたことだと思つてゐる中に年は天祿三年になつた。

さて入ノ宮は、大鏡、栄華、日本紀略、尊卑分脈等に依れば、悉く一條天皇の永延二年廿四歳で薨去せられた事になつてゐるから、その御誕生は、村上天皇の康保二年でなければならぬ。従つて天祿三年は、御年八歳に当り、この出来事は、天祿二年御七歳の時の事でなければならぬ。この年齢は問題にしてもいいと思ふのであるが、なほ少しく榮華を讀んで見よう。

「ついたちには、かの宮御装束めでたくしたて、宮へまゐらせ奉り給ふ。」とあるのは、天祿三年正月拜賀の礼の爲である。御

挨拶の詞を教へることを、今度は濟時も忘れてゐた。

中宮には、入宮が御出ましになつて、御前に拜礼されるので「いといと哀にうつくし」と御覽になる。特に氣をつけて、御褥などをすゝめ、然るべき女房達なども、花やかな装束で出迎へて、「御通り遊ばせ」といふと、威儀をつくろうておはひりになる御態度の立派さに、「あな美しや」と思はず讚嘆の聲が放たれる。入ノ宮は端然と褥に坐してゐられる。女房達は、何をどう申しあげたらよからうと、扇に顔を隠しながら、膝つき合せ居並んで、「あゝ恥づかしい。小一條の姫君様のやうな御立派なお方ならともかく」などと言ひ合つてゐる矢先、声づくろひをして入ノ宮の仰せ出たされたお言葉の不思議さ！「御惱の由承りまして、参上仕りました。」と仰せられるではないか。これは、昨年中宮御惱の御見舞に、叔父宰相からをそはつた口上をそのまま、正月元日の今日の拜礼に流用？されたのである。

中宮は、あきれて物も仰せられぬ。女房達は、何といふこともなくさつと笑ひ出す。「まあ世間話にもなりさうな宮様のお言葉だこと」などさゝやく声に触発されると、もうこらへ切れず、一座はどつと笑ひのゝしるのである。宮は、ばつの悪さに、例のお顔を眞赤にして、「いやよ、叔父の宰相が、去年御惱の折、参つたらかう申せというたことを、今日いうたとして何がかしい？げらくと物笑ひをようする女房達の多い宮さんぢや。無用ぢや、もう来はせぬ」とむつとして退出される御有様のをかしさ。濟時の邸に歸られて、「今日はあきれたことがあつた」と話されるので、「何事です」といふと、「もうどうあつても中宮へは参

らぬ。参れといふなら鷹を殺せ。」^{八宮}「いや一体どうなさつたといふのです。」^{八宮}「御惱の由承りまして参上仕りましたといふと、女房の奴が十人か二十人出てゐて、ホホ／＼笑ひよるのぢや、ほんとに腹が立つた。それで急いで出て来たのぢや。」と仰せられるので、濟時^{八宮}もあきれて、深く黙りこんでしまふ。「いや、黙つてをられるのは、鷹のいひ方が悪かつたからか。去年行つ時、さう申せといはれたから、それを忘れずに申したのは、どこが悪い。」と不機嫌なので、いや大変な事だと濟時^{八宮}もふさぎこんでゐた。

拙訳汗顔であるが、大意は右の如くである。

これは、前の乗馬の場合に比し、可笑性といふ一点から観れば可なり純粹に表現されてゐると思ふ。無論用語の妥当性を缺き、叙述の冗漫に流れた点もあらうが、中宮の期待の大きさ、八ノ宮の美貞、そのきららかな直衣姿、物言はぬ弱点さへも、村上の聖帝を父君と仰ぐ血統の尊貴、性格の鷹揚さゆゑと取り做され、御惱見舞の挨拶も淀みなく述べられたといふ叙述や描写は、笑に導く伏線としては、申し分のない好條件である。婦郎の後、叔父の為に敬語の誤用を指摘されて、卒直に「をい／＼さなり／＼」と肯定しながら、さまで意に介されぬさまも、その好條件を傷ける素材とはならぬ。元日拜礼の際における中宮からの御款待、女房達の物めでぶりも、前の好條件に大きなプラスとなつてゐる。それを、急激に、この物語の山「御惱の由承りてなむ云々」へ飛躍せしめる。だから、人は、礼法を顧慮する前に、まづ失笑しないではゐられないのである。女房達の笑も自然であるが、宮の種明

かしや、憤慨ぶりも、無邪氣でいゝ。最後の濟時との問答も利いてゐる。たゞ「殺しに殺されよ」といふ言葉は、やゝ誇張にすぎて感じられもしようが、それは、情況判断を誤つて自己を臨機に環境に適應せしめることの困難なこの種の人にありがちの氣持であり、「去年参りしに、さ申せとのたまひしかば、それを忘れず申したるは、いづくの悪しきぞ」と自信満々で詰め寄る所も棄てがたい。

要するに、この物語には、前のやうな意地悪は、ゐないし、又、作者は、讀者の同情心を刺戟しやうな用語を避け、讀者を傍觀的態度へと導くため、可笑性は可笑性のまゝ、純な形態で現はれてゐるのである。

そしてこの可笑性は、前の乗馬の場合や大鏡の場合と共に、結局、当代公家の礼法に違反する行動に対する社会的懲罰のそれであり、所謂侮弄のそれである。

かけまくもかしこき次第ながら、八ノ宮の精神年齢の何歳に当られるかを私は知らぬ。けれども“Idiot”や“Imbecilia”のそのれのやうな甚しいものでないことは、御行動が証明してゐる。たか／＼それは、“Moron”の段階に属する程度のもの（智能指數四〇—七五、精神年齢七歳—十二歳）と推測せられる。（赤井兩氏著精神衛生）従つてそれは、正常者と明確に區別することの困難なものである。なるほど、年賀拜礼の場合のやうに、自己の環境への適用を著しく誤られた事例もあるが、濟時の訂正を、「さなり／＼」と判断しながら、之を等閑に附するやうな不注意

や意志力の薄弱さは、正常児にも常に見るところで、敢へてお咎め申すに及ばない。

大鏡の場合の八ノ宮の御年齢は、不明であるが、酒間のエテイケットは、一種特別の歴史を残してゐる。社会統制の最大必需靈液として出発した酒は、人の嗜好も体力も無視して、之を強ひるのが美風であり、酔うてつぶれて感謝するのが道徳であり、中座は、社会団体の統制を破り、共同精神に龜裂を与へる反社会的利己的行動として集団の排撃をうけてゐる。山上憶良の罷宴歌は、この間の消息を雄弁に語るものである。けれども、酒の座の気分は、ただ狸々のみが狸々を知る底の、いともデリカシイなもので、尖锐微妙なセンスを惠まれない限り、到底子供や下戸の窺ひ得る心境ではない。まして微妙な雰囲気を感じ、一瞬の機会を捉へて、中座する上達部を、「しばし」といつて「をかきさまに」止めよと強要する如きは、無慈悲な無理といふものである。だから、大鏡やその中の世人が、批判の鋒を濟時にむけてゐるのは、至当と謂はねばならぬ。

栄華の年賀拜礼の場合にしても、朝夕の挨拶と違ひ、古風を守る改つた節日のそれは、八歳の八ノ宮にとつては、一個別世界のそれではなければならぬ筈である。それを作者は、噴飯笑の好対象としてゐるのは、親王にとつてはまことに御氣の毒と申す外はない。たゞ作者が、我々をしてこゝに思ひを運ばぬやう、刺戟的言辞を避けて、生々トリアルに写実の筆をとつて、可笑性を純化してゐること前述の如くである。こんな物語は、莫迦らしい事件だと軽く片付けてしまふことも出来ようが、所詮可笑性は、侮辱

にしる感賞にしる、対象を軽き小さなものとして受取る性格のものであつて見れば、これまた当然のことではなければならぬ。

題材の可笑性に就いては、花山院の御騎行、冷泉院の御狂ひ、その他にも現はれてゐるが、尙一つ清範律師の場合を挙げて、この項を終へよう。

雑々物語の條に、清範律師が、犬の為に法事をする人から講師として招聘せられた時、清昭法橋、これも、当時清範と声名を齊うする能辯の説法者であるから、一体どういふ具合に清範の説法がなされるものかと、頭をつゝみ隠し誰とも氣附かれないやうに聽聞してゐると、「只今や、過去聖靈(犬の靈)は、蓮台の上にてひよと吼え給ふらむ」と言はれたので、「そこだ！誰がかういふ事を思ひつかう。やはりこのやうな頓才のある点が、優れた御房たる所以だ」と称讃せられた。現に私もそれを承つたが、實にかしかつた。聽聞の衆も、さつと笑ひどよめいて歸つて行くのであつた。実に氣輕な（安ッばい）仏様ですわな。全く無益な贅談ですが、この僧の才氣煥発、機智に富んで居られるのが面白くて、感心に思ひましたから御話し申すのです。(原文)と世継の翁はことわつてゐる。(意訳)

清範は、古事談に「於三諸法一無雙、文珠の化身とぞいはれける。不可思議不可勝計」と謂はれ、枕草子にも、「朝座の講師清範、高座の上も光り満ちたる心地して、いみじくぞあるや」と礼讃され、その辯舌は、山門三千の大家に口を開かせなかつたといふ。

この可笑性の性格は、前数例と趣を異にし、岡崎義惠氏の謂はれる「感賞のをかし」、「侮弄のをかし」の混融である。狗子の成仏は、後者であり、清範への讚美は、前者であり、前者が、結局、後者への資料として融けこみ、その可笑性を成立せしめてゐる。この種の可笑性は、枕草子などに、多く散見するところで、今多く語る必要を認めないであらう。

四

可笑性

iii

題材のもつ可笑性の外に、なほ、大鏡の世界を明るく朗らかにしてゐるものは、題材を語る翁達や聽手たる人物の云為行動のもつ可笑性である。しかし、これも、語られる人物や、事件にからんで作中に登場する以上、畢竟、題材の一部と見做し得るものであるが、今一応便宜のため之を分割して述べて見よう。

かつて言及したことのあるやうに、翁達を途方もない高齢者とした事は、長い年月に亘る史実を、現にその目が視、その耳が聽いた事実として、聽者読者を信頼せしめる一手段で、大鏡の「現実性」を論じる際改めて触れたいと思ふが、この高齢のゆゑに、語り手の翁達は、大鏡の聽衆や我々読者の地平をはるかに超出して、同じ次元に立つて競争を強ひられる我々を、その競争圏外の傍觀者、利害を離れた觀照者たらしめるために、普通ならば鼻もちのならぬ彼等の自画自讚も、愛嬌に満ち、可笑性に富み、聽者の疲労や倦怠感を一掃し去る淨化剤として働いてゐる。

大鏡題号の出所の條に、繁樹が、「いでき、給へや、歌一つ作

りて侍り」と、ふつゝかな歌を、はづかしげに詠み出すさまをかしく、それを心の中で「あまたたび誦してうめきて」返し歌する世継のさまも滑稽であり、「いかに、古の古だいの鏡は、かねしるくてかくぞあかき」と「したり顔に笑ふ顔つき」も、「絵にかかまほしい」と許りに面白い。何か「翁の面」にでも對するやうで、子供のやうな無邪気な笑の中に、一種の崇高さへ感じさせる。基程の條で、世継が、「四郎太政大臣忠平」といへば、繁樹の態度は、俄然一変して、「まづ後の人の顔うち見渡して『それぞいはゆる、この翁が宝の君貞信公におはします』と、得意になつて扇を使ふ茶目ぶりもかはゆく、道長の條で、世継が、鎌足を不平等と取り違へたに對し、繁樹が、「大織冠をばいかで淡海公とは申させ給ふぞ」と咎め、「主のたまふ事ども」、所謂懸河の辯で、「天の河をかき流すやう(淀ミ)侍れど、をり／＼かゝるひがごとを交りたる。されども誰か又かうは語らむな。仏在世の淨名居士とおぼえ侍るものかな」と褒め立てると、世継は、「昔書国に孔子と申す物しりの宣ひけるやう侍り、『智者も千々の慮おもひはかりの中には必ず一つあやまちあり』となむあればこの格言は孔子の語ではない。晏子の言である。世継、年百歳にあまゝり、二百歳に足らぬ程にて、かくまでは問はず語り申すは、昔の人にも劣らざりけるにやあらむとなむおぼゆる」と、最大級の自讚をし、繁樹が、「しか／＼まことに申すべき方なくこそ侍れ」と相植をうつて、「かつは涙をおし拭ひぬぐなど感するさま」も、可笑性に富んでゐる。殊に滑稽なのは、世継が、淨名居士や孔子に比較し、また比較されながら、この數行の間に、大鏡の誤謬やウ

ソが、二つもあることである。何といふその底心の淡白さ、屈託なさであらう。なほ大鏡のウソについては、その虚構性の條に、改めて考察を加へたい。

世継が妻の自慢をして、「この翁の女人(妻)こそ、いとかしこく物はおぼえ侍れ。云々」といふと、青侍は、「いかでさる有識(物議)をば、物げなき若人にてとりこめられしぞ(虜ニセラ)レタカ」と問ふ。「さあ、そこです。そんな色好みをした者が、心にもなくわたしのうちに参ることになつたもんですから、みすぼらしい身分を恥ぢて、大分夫婦喧嘩もしましたさ、でもあれほどに手をかけ初めたからには、どうして傍目をさせませう。その中に、ままと居ついでしまふと、この翁を一夜だつて離しませんからね」などのろけたり、上東門院が、出家して法成寺の戒壇で受戒される囁には、後を慕ふ世間の尼達が、先を争うて之に倣ふといふ噂を聞いて、世継の妻が、「私も、せめてその時には、白髪のすそをそぎ捨てませう。え、いけない?、なぜお止めなさる?」「誰がとめるもんかい。だがな、その後には若いいのを探し出してやるばかりぢや」などと、堂々たる歴史の中に、一家の私事を挿んでも、それが何等の障害をなさない許りでなく、天真爛漫な態度や、ヒューマラスな口唱性が、聴衆(読者)を自己に同化せしめて、一切の聴衆を、聴き上手と変化せしめずには措かない。そして聴衆も亦、博大な寛容な心を以て、人生を觀照し、歴史を味解するのである。

以上、題材、話者の両面から、可笑性を概観した積りであるが、かの大鏡中最大最強最深の皮肉で道長への抗議の一條でさ

へ、著者は、その諷刺や皮肉を、申文の可笑性に包むことを忘れないのである。

かうした大鏡の可笑性は、一体どこから産れたか、その地盤は、そもく何か。著者は、大鏡の名にふさはしく、その色無き博大な心の鏡を以て、人世の種々相を、明暗表裏にわたつて映し出す。そして、人生の「眞実」を、自らに感得せしめようとする。けれども、そこには、なほ單純にかういつてしまへない何物かがある。その何物かとは何か。

巻頭序文に、世継の翁は、歎じていふ。「世はいかに興あるものぞや」と。この力強い切実な叫び声こそ、著者の思はずも放ちあげた心の声でなくてはならぬ。言葉のリズムが、端的直截にか訴へるからである。

彼は、無上のインタレストを人生に見出し、心からそれを愛する。人生の裏面、暗黒、罪惡、醜穢を、そのままに見つめつゝ、彼の大なる愛(善意)を以て、それらのものを和らかく包む。

ここから産れてくる宏大な寛容性に対し、それらの暗黒面は、比率的に弱小化し、ほゞ多ましく、をかしきものとして、その姿を顯現するのであると考へられる。

要するに大鏡の可笑性は、皮肉や諷刺や輕侮の懲罰的な笑から、天真、ヒューマ、感賞の笑に到るまで、すべては著者の人間愛を地盤として發生したものと観るべきではあるまいか。